

たしかに、ここだ。このツツジの植え込みと街路樹にそったガードレールのわきに、かつて三年半もとまったままの乗用車があり、ひと組の夫婦が暮らしていた。だが、九六年四月一八日の夕、助手席で夫が、運転席で妻が死んでいるところを発見された。検視の結果、夫は死後約二週間、妻は死後約一週間で、体は極度にやせほそり、栄養失調と寒さによる衰弱死とわかった。つまり、**餓死**であった。夫は**六八歳**、妻は六四歳だった。

車内には毛布、ビニール袋に入った着がえ、タオル、傘、携帯用ガスコンロ、鍋、醤油、マヨネーズなどが残されていた。所持金は十円玉数枚のみ。車は年式は古いが高級車のトヨタ「**ソアラ**」で、タイヤがパンクし、ガソリンもなく、車検は三年まえに切れていた。窓には中が見えないように内側から新聞紙が張られていた。むろん、いま、その車はあとかたもない。

動かなくなった乗用車を家がわりに何年間も暮らしたすえ、ついに餓死したふたりのことは、新聞記事（「朝日」九六年四月二〇日）で知った。見だしに、「夫婦は寄り添って死んだ」とあった。

記事によれば、ふたりは車内生活を始めるまえは、江東区内の公団住宅に住んでいた。しかし、夫が病気のため職を失い、九一年ごろから家賃を滞納しはじめた。翌年の四月、家賃未払いで公団から強制退去させられた。夫婦は自家用車に居を移した。しばらく団地のそばにいたあと、夢の島公園をへて、新木場四丁目の路上にやってきた。警察や福祉事務所が何度も、「車両生活」をやめるように指導したが、ふたりはそれを聞き入れなかったという。

・・・

夫婦がこの団地に入居したのは、一九七〇（昭和四五）年だった。団地ができた翌年で、建物は真新しく、当時まだ珍しい高層住宅として高級視されていた。ふたりとも小柄なほうで、**一橋大卒**の夫は運送会社で経理課長をし、白百合女子大を出た妻は近所の子どもらにピアノを教えていた。

・・・

ところが、夫が五十代半ばのころ、**二階にある部屋のベランダ**で植木をいじっているときに**誤って転落し、足を複雑骨折したことから生活は暗転**する。体調をくずし、会社もやめざるをえなくなった。

その後、いくつかの職についたが、勤め先が倒産するなどして収入の道を閉ざされた。家賃（およそ五万円）の滞納が始まり、電気・ガス・水道もとめられた。夜、かくれるようにしてダスト室からバケツで水をくんでいたという。家賃滞納がまる一年に達した九二（平成四）年四月、公団から強制退去させられた。

東京都荒川区の裏町。アパートの四畳半の部屋で、「**病気に負けました**」と遺書に書きつけて、**七九歳**の夫と七五歳の妻が首を吊って死んでいた。遺書は千葉県に住む長女にあてたもので、部屋には線香のたかれた跡があった。ホームヘルパーの話では、妻のほうが脳梗塞をわずらい、足も不自由で、亡くなる半年あまりまえにひと月ほど入院してからは、口数が少なくなっていたという。

■妻の痴呆症；夫と息子による介護

くにさんは夫を慕い、素直に言うことをきいていた。デイサービスで施設に行っても、早く家に帰りたがった。しかし、くにさんの症状はだんだんとひどくなり、トイレや着がえをいやがって抵抗したり、夜も眠らずに歌ったり、鏡に映った自分の顔もわからずに話しかけたりしはじめた。下着やジャージの上下など、尿失禁による**せんとくものが毎日山のように出た**。

「鏡に映っているのを他人だと思って話しかけているのを見ると、かわいそうで仕方ありませんでした。せんとくは、ほとんどわたしがしてました。夜二時ころ帰ってきて、洗って干すのが大変で、途中からは乾燥機を買いました」

・・・

「おふくろさんは、一日に三回から四回は着がえをさせました。だだをこねたり、怒ったりもするけど、なだめて、子どもをあやすようにして着がえさせるんですよ。時どきくすぐっ

たりしてね。トイレに連れていこうとしても、介護用ベッドの手すりをつかんで踏んぱたりしました。とにかく、うまくなだめるしかないんですよ。はじめのころは、こっちもカーッとすることがあったけど、**こっちが怒っちゃおしまい、だめなんですよ**ね」

「だけど、おやじさんはどうしてもむきになってしまうんですよ。言うことをきかないと、いらいらしたりね。やっぱり自分の妻を子どもあつかいにはできず、真っ正面から向きあってしか接しられなかったんでしょね……。おふくろさんはテレビもつけっぱなしだし、夜どおし起きていて、デイサービスでおぼえてきた歌をくりかえし歌うし。わたしは二階で寝てましたが、おやじさんは居間でおふくろさんといっしょに寝起きしてたから、**睡眠不足で疲れ果ててました**」と、邦夫さんはため息もまじえつつ介護の日々を語る。

■痴呆症の夫の介護

幸晴さんは道子さんが誰なのかはわかっていたようだが、だんだん言葉もうまく話せなくなっていった。手まねで何か伝えようとするが、道子さんが理解できないと、怒りだす。そのたびに、道子さんはどうしようもない無力感におそわれた。

「ある日、おむつ替えのときに、抵抗する主人に**突き倒されてタンスで頭を打ち、気が遠くなりかけた**んです。主人は仏間に放心状態でいました。まえはあんなに思いやりのあった夫の変わり果てた姿に、胸がしめつけられて涙がこみあげました。なぜ自分たち夫婦がこんな苦しみを受けなくてはいけないのか、何も悪いことはしてないのに、神様も仏様もあまりにひどい、と仏前に泣き伏しました……」

■遷延性意識障害

遷延性意識障害とは、植物状態や植物症とも呼ばれる慢性の意識障害である。その定義や名称や分類は諸説あるが、一九七二年の日本脳神経外科学会による定義では、①自力で移動できない、②自力で食べられない、③大小便が失禁状態、④目で物を追うが認識できない、⑤手を握りなさいなどのかんたんな指示に応じることはあるが、それ以上の意思疎通ができない、⑥声は出すが、意味のある発語はできない、といった状態が三カ月以上つづいている場合をいう。

遷延性意識障害になる原因は脳卒中（脳出血や脳梗塞やクモ膜下出血）、脳腫瘍、交通事故やスポーツ事故などによる頭部外傷、心臓発作や麻酔ミスなどでの一時的な心肺停止による低酸素脳症、一酸化炭素やサリンなどの中毒……。とさまざまだ。

■脳卒中；過労、ストレス

結婚生活一一年目で、突然、働きざかりの夫が倒れた。しかも、意識がもどるかどうかわからない。想像だにできなかったその事実の前で、美紀さんは立ちすくんでいた。

「寝たきりになった夫は自力で痰が出せないで、呼吸をしやすいするために気管切開をして、のどに穴を開け、管（カニューレ）をつけました。体の抵抗力が落ちて、何度も熱を出しました。手足も動かさないので、日に日に細くなって固く縮んでいきます。その拘縮を予防するための病院のリハビリは一日に一〇分しかないで、わたしの父が毎日ベッドにあがって根気よく、二～三時間も夫の手足を動かして揉んでくれました。・・・」

・・・

美紀さんが娘の言葉を受けて、こう語った。

「わたしたちは**これでも幸せなんだ**ということを、どう伝えたらいいのかな、って考えることがあります。意識の回復はむずかしくて、もちろん望みは捨ててませんが、もうそんな大きな変化を期待はしてないんですよ。治る見こみがないんだったら、家でおだやかに看取ってあげたい。でも、意識がなければ生きてる意味がないとは、家族としては考えてなくて、**意識がなくてもいっしょにいられるだけで意味がある**と思っています」

「だから、尊厳死や安楽死のことを新聞などで読むと、悩みます。自己決定権にもとづくとはいっても、**植物状態がその人にとって生きてる価値がないという考え方が唱えられると、わたしたち家族は目に見えない圧力を感じてしまう**んですよ。こんな状態の人でも生きていいんだよって、声をあげたくなるんです……。生産や効率に役立たなくても、生きていいんだと、むだないのちはひとつもないんだよ、ということをお伝えしたくなるんです……」

しかし、淳二さんが熱を出したとき、気管切開部に挿したカニューレの交換や鼻腔栄養の管を入れるとき、髪の一部が円形に脱毛したのを目にするとき、夫は苦しいだろうな、痛いだろうな、ストレスがきついだろうな、と美紀さんは想像し、もしも自分が同じ立場におかれたら、つらいからもうやめてほしい、もう生きていたくはないと思うかもしれない、とも考えるという。

田中栄三さんは一九七三（昭和四八）年一〇月一九日の夜一時ころ、マグロ船の仕事をやめたあとに機関長として乗っていた貨物船が神戸港に停泊中、埠頭に渡した**踏み板から転落**し、五メートルほど下のコンクリートに頭からたたきつけられた。神戸製鋼の鋼材を積む作業中のことで、踏み板の揺れがはげしく、バランスをくずしたのだった。すぐに神戸製鋼系列の神鋼病院に運ばれたが、危篤状態におちいった。

・・・

「戦争さえなかったら、素潜りが得意で心臓も肺もじょうぶだったおとうさんは、一〇〇歳までも生きられる体やった。神戸であんな大けがしたのは、**左足が義足**やったから、踏み板を渡るときによろめいて落ちてしもうたんです。だから、今度生まれかわるときは、戦争のない時代に生まれてほしいと、つくづく思いますね……」

■妻に先立たれる

家にも何も手につかないし、会社の仕事はいちおうやってるんだけど、先を読んで考えるようなことができません。また、家のなかには、家内のものがたくさん残っているわけです。衣類や靴や食器や……。タンスの引だしを開けると、わたしのものと家内のものがならんで分けてあって、自分のものをとるときに家内のものも目に飛びこんできます。そのたびに思い出して、そして、肌着を見ると胸がきゅーんとつまってきましてね……。奥さんを亡くされた人に聞いてみたら、それはもう目に入らないように捨ててしまったほうがいいよと言われて、半年後に肌着は処分しました」

ウィドウ・ミーティング（配偶者を亡くした人の立ち直り）

批判や悲しみくらべはしない。

「でも、姿は見えないけど、夫がいつもいっしょにいてくれると信じています。落ちこんで眠れない夜、夫がふとんに入って**添い寝**してくれるのを感じるんです。ほらあ、寝ろお、寝ないと体もたねぞお、少しでも寝ないといけねぞお、という声が聞こえてくるんですよ。ふつうにしゃべってるときの声でね。その声が耳もとで聞こえるんです。そうやって**おとうさんが言う**と、**自然と、すーっと眠られる**んです。安心したという感じで。仏さんといっしょに……。不思議なんですけど、ほんとうにそうなんです。連れ合いを亡くした人でないとわからないだろうけれども、でも、ほんとうにそうなのよ。だから、亡くなって一五年目になるけど、大変だけどいっしょにがんばろうよね、とわたしも呼びかけています。仏さんにね……」

■島尾敏雄

どうもなさそうだから、（念のための）入院のしたくをするために、ミホさんがいったん帰ろうとすると、『**気をつけて行ってらっしゃい**』と、島尾がわたしに申しました」

結果的にはそれが、ミホさんが聞いた敏雄さんの最後の言葉となった。

一時間後に、ミホさんが病院にもどると、敏雄さんは眠っていた。ふつうの寝顔をしていた。深い眠りに見えたという。つきそっていた娘のマヤさんから、ミホさんがいないあいだ、「おかあさまはまだですかー」と、敏雄さんが言いつづけていたと聞かされた。

しばらくして、ふいに敏雄さんの足に痙攣が走った。ミホさんは、これはただごとではないと思って医師を呼んだ。敏雄さんは急いで検査室に運ばれた。そこで、脳の血管に血栓が詰まって脳梗塞が起き、さらにふさがった血管が破裂して脳内出血も起こっていることがわかる。

医師からは、「手術をしてもほとんど見こみがない」と言われたが、ミホさんは、「たとえ見こみがなくとも、一〇〇分の一の可能性でもあれば手術をしてください」と訴えた。「そのお覚悟でおっしゃるなら」と、手術がおこなわれ、夜中の二時ごろまでかかってぶじに終わった。

しかしその甲斐もなく、敏雄さんは昏睡して意識がもどらぬままだった

東京でさまざま

な文学団体に入り、交友関係もひろがるにつれ、敏雄さんは外出して家をあけることが増えた。生活にも乱れが生じていく。上京して二年後の秋九月、ついに破局が訪れた。

「時どき家に帰らなくとも、女の人から手紙が来ても別段気にもかけませんでした。夫がすることは、小説を書くための勉強ならどんなことをしてもいいと思ってました。夫とわたしは常に一心同体と考えていたのです。しかしある晩、こたつの上に開いたままになっていた夫の日記を見て、わたしは衝撃を受けて、雷に打たれたように床に伏しました。精神が混乱して、異常な状態になりました。ずっと机の上は夫の神聖な場所だと思っていましたので、そこにあるものにそれまで一度も目をとめたことはなかったのです。ただ、そのときはなぜか目をとめてしまいました……」

・・・

「わたしは精神がおかしくなっていました。混乱して被害妄想が浮かんできて、それを島尾に言い立てました」

ミホさんは神経症を病んだ。極度の不眠がつづき、昼も夜もなく夫にとめどない怒りと怨みの言葉を投げつけた。自らの行為を悔いる敏雄さんの心もさいなまれる。家庭はおたがいを傷つけあう修羅場の様相を呈し、生活はずたずたになった。

・・・

(精神分析を受けた)

その結果、わかったことがある。ミホさんは南島のおだやかな風土と共同体のなかで、父母の深い愛情を一身に受け、しかられたおぼえもなく、**競争心や嫉妬や憎悪といった感情を知らずに育ってきた**。ところが、思いをささげ信じきっていた夫のまさかの背信で生まれてはじめて嫉妬を経験し、精神が混乱の極みに追いやられたのである。

■島尾敏雄は「震洋」の隊長

島尾隊長とは、ミホさんの亡き夫で、『島の果て』『出発は遂に訪れず』、映画化もされた『死の棘』などの作品を残した、作家の島尾敏雄さんの若き日の呼び名だ。敏雄さんは一九四四（昭和一九）年十一月、二七歳のときに「震洋隊」隊長として加計呂麻島の呑之浦基地に赴任した。

「震洋」は太平洋戦争の末期に、日本海軍が「人間魚雷」といわれた「回天」とならんで開発した兵器である。全長五～六メートルのベニヤ板製モーターボートの舳先に二五〇キロ爆薬をつめこみ、ひとりかふたり乗りで敵艦船に体当たりして自爆する。つまり、特攻艇であった。

学徒動員による海軍予備学生出身の中尉だった敏雄さんは、隊員一八三名、震洋艇五〇隻からなるこの特攻部隊をひきいた。彼はいつ下されるかわからぬ出撃命令を待ちながら、戦争が終わる昭和二〇年の夏まで、常に死の領域につづく一本道に立たされていた。生死の境界につまさき立って未知の常闇の入口を見つめる、張りつめた日夜を送った。